

G. Greene 研究

—ふたりの Rose—

—その1—

宮野祥子

I

G. グリーンの形象した人物のなかから、この小論においては、そのひとつの像として、Rose という女性をとりあげてみたいと思う。Rose という名前の女性は、以下の3作品に登場し、そのいずれもが人を愛する存在であることに、そのポイントが置かれているようである。

- *Brighton Rock* (小説) 1938年
- *The Confidential Agent* (小説) 1939年
- *The Living Room* (戯曲) 1953年

これらの作品を通して、Rose という女性には、彼女と関わりをもつ男性を慰藉し、肯定し、生かし続けようとする女性のひとつの姿が、形象されていると考えられるのであるが、それはグリーンがしばしば〈innocence〉という言葉で述べている女性のもっているひとつの役割である。だが、男性にとっての永遠の憧憬となるようなこの性格を備えているが故に、逆に利用され、巻き込まれ、そのために苦悩したり、生命を失うにいたる女性、つまりグリーンが描出する現実のなかでは、存在することが困難であるような女性である、ということでもできるのである。このような女性の姿を、作品の順を追って考察しようとするのが、この小論の目的である。それは Rose という名前の与えられた女性たちの内的変化を、その変貌の過程を追うことによって明らかになることである¹⁾。まずⅡ章では、*Brighton Rock* と *The Confidential Agent* に登場する三人の女性、Rose Wilson 及びその分身とみなされる Rose Cullen と Else の、無知無理解であるために、

愛においては純粹で、一途であり得る女性の姿を捉えてみたいと思う。それはまだ人間としては、幼い、自分の内部に絶望にいたる限界のあることに無知である人間の姿でもある。Ⅲ章（紙幅の都合で割愛した）では、Ⅱ章で明らかになった Rose 像が、戯曲 *The Living Room* の第一幕における Rose Pemberton の姿であること、第二幕では、その Rose 像が人を愛することの哀しみとその限界を通して、自らの内部に潜む人間の限界に気付き、絶望を知るといふ、人間としての成熟へと向う過程を考察してみたいと思う。*The Confidential Agent* と *The Living Room* の間には、グリーン作家としての15年の年月とその間の作品が存在し、同時に一幕の Rose Pemberton と二幕の Rose Pemberton の間には、劇中では3週間という時間の経過が設定されているが、彼女の内的変貌という点から考えるならば、グリーンの15年間の作品が介在しているのである。つまり、一幕の、無知と無理解という若さの故に、一途に自分の愛の完成を追求しようとする Rose から、二幕の、愛することの哀しみと、人の心の傷の痛みを理解する Rose への変貌には、15年間の作品中の女性たちの姿が、影のようにつきまわっていると考えられるのである。即ち、1943年の *The Ministry of Fear* における Anna Hilfe であり、1948年の *The Heart of the Matter* の Helen であり、1951年の *The End of the Affair* の Sarah である。この女性達の苦悩や悲しい決断や心の痛みを経て、Rose Pemberton は形象されており、自他の心の傷を、人間が生きていることの痛みを、知る存在へと成熟しているのだと考えられるのである。作者が Rose と名づけた女性たちが、以上のような過程を経て、内的変貌をとげている姿を、そしてその意味するところを考察してみたいと思うのである。テキストは *Brighton Rock*, William Heinemann & The Bodley Head, 1970年版, *The Confidential Agent* も同じく1971年版を使用している。

II

Brighton Rock は第一次大戦前の、英国の海辺保養地 Brighton を舞台

に、17才の、Pinkie というアウトローを主人公とする作品である。この作品の世界は、一つには現実の社会を秩序づける道徳に基づく世界観と、カトリックの信仰に基づいた世界観との拮抗を、つまり道徳律内での正・不正と、カトリックの示す善・悪とによる人間理解の拮抗を縦糸とし、さらに他方、カトリックの世界における善と悪との拮抗の有様を横糸として織り出される一枚のタペストリーである。この世の道徳によっても、カトリックの教えに依っても、不正と悪の存在であると自他ともに見なされている主人公 Pinkie と、彼をとりまく二人の女性は一枚の構図のようである。つまり邪悪である Pinkie と、道徳律の示す正・不正という基準に従う Ida と、カトリックの示す善（聖性の暗示）を具現する Rose とが、どこで切ってもブライトンという文字の出て来るという、糖菓子ブライトンロックのように、一枚の構図として位置されていると考えられるのである。従って正義に属する者であることを公言し、Pinkie を追いつめる Ida と、彼が邪悪であることを承知で、彼を愛するために、彼の側に属することを選びつつける Rose とが、つまり正義と善とが、奇妙にも対立関係を保つように意図されているのである。

Rose Wilson は、やせて骨ばった、青ざめた顔色の、無知な16才のウェイトレスである。Pinkie は自分のひき起こした殺人事件の真相をあばく鍵を Rose に気付かれたと思い、彼女の口を封ずるために、嫌悪感を感じながらも彼女に接近する。Pinkie を信じ結婚した彼女は、やがて彼が殺人を犯したことを知るが、彼の愛だけは信じて疑わず、彼とどこまでも行動を共にしようとする。心中に見せかけて彼女だけ死へ追いやりようとした Pinkie は、真犯人を追い続ける Ida に追い詰められて、所持していた硫酸を浴びて崖から海へ転落、死亡する。Rose は Pinkie と一緒に死んで、愛することの責任を貫くことができず悔むが、胎内の子供に、Pinkie の存在を確認し、生き続けようとする。彼女は Pinkie の愛を証明するはずのレコード（これは結婚の当日、Pinkie が彼女に贈ったもので、愛の言葉ではなく、〈畜生、ズベ公め、どうしてとっとと家に帰って、永久にほっておいてくれないんだ〉(p.220) という言葉が録音されている。)を聴くべく

歩み始めるのである。

このような Pinkie と Rose の関係は、互いに相手を完全にする 〈complete〉 こと、そして同時に、互いに敵 〈enemy〉 である、という関係として設定されている。

Pinkie は、我は唯一なる悪魔を信ず 〈Credo in unum Satanum〉 (p.205) と公言する神への反逆者である。その彼の邪悪 〈evil〉 であることを完成する 〈complete〉 ものとして、Rose が善 〈goodness〉 の存在であると、Pinkie は気づくのである。

He was aware that she belonged to his life, like a room or a chair: she was something which completed him. He thought: She's got more guts than Spicer. What was most evil in him needed her: it couldn't get along without goodness. (p.155)

(彼は彼女が自分の生活に密着しているのに気づいた、部屋や椅子のように、彼女は彼を完全にする何かなのだ。彼は思った、彼女はスパイサーよりも腹がすわっている。彼のなかの最も邪悪なものが彼女を必要とした、それは善なしにはやっていけなかった。)

She was good, he'd discovered that, and he was damned: they were made for each other. (p.155)

(彼女は善良だ、彼はそれを発見したのだった、そして彼は地獄に堕ちていた、彼らはお互いに補うべく作られたのだ。)

ここに述べられているのは、A.A. DeVitis も述べているように²⁾、Pinkie と Rose とがあたかもコインの表裏のように、お互いがお互いを存在させ、そしてひとつの意味となりえている姿である。つまり Pinkie の、神への反逆者、邪悪な存在であることは、Rose の善をその意味づけのモメントとしているのである。そのことはまた、二人が Ida や Pinkie の手下達には理解されない、カトリックの世界の住人であることも表わしているのである。二人は〈善と悪は同じ国に住み、同じ言語を話し、古なじみの友達

のように、一緒に居ることで完全であることを同じように感じながら〉
(p.156) Ida の住む道徳の世界に立ち向い、Pinkie は Rose との間に、同じ
仲間であるという共感 〈sense of communion〉 (p.212) を感じてさえいる
のである。

しかし Rose は Pinkie にとっての敵 〈his enemy〉(p.265) でもある。ただ
単に邪悪と善という対立する存在にあるというだけでなく、Pinkie の殺人
を証言できるだけでなく、結婚によって Rose が具体的に Pinkie の世界へ
の侵入者となり、それまでの Pinkie の自由の世界を脅かす者となってい
るということである。彼は Rose を妻とすることにより、警察に対しては
証言を封ざることができたわけであるが、結婚によって生涯 Rose の愛を
つなぎ止めねばならないことを思い、〈死のみが彼を自由にする〉 (p.233)
ことを思い知って愕然とするのである。以前の独りでいたころの心安らか
な生活はもう永久に戻ってこないことを知った Pinkie の不安と動揺は、
彼の心中に本来的な意味での 〈peace〉 への希求をよび覚ますのである。
彼は結婚の翌朝早く散歩に出て、ロザリオを手に祈りをつぶやく老婆を見
かける。

...it was like the sight of damnation. Then he heard the whisper,
'Blessed art thou among women,' saw the grey fingers fumbling
at the beads. This was not one of the damned: he watched with
horrified fascination: this was one of the saved. (p.234)

(…それは地獄に墮ちた永遠の罪人を見るようであった。その時彼は
つぶやく声を聞いた、「汝は女のうちにて祝福せられたるものなり」
灰色の指がロザリオをまさぐっているのを見た。これは地獄に墮ちた
罪人ではない、彼は恐怖を感じながらも魅せられて見つめていた、こ
れは救われた者なのだ。)

地面に座って、朽ちていくように見える老婆に、恐ろしい魅力を感じて
見ている Pinkie には、救われて、心の平安を得ることへの強い憧れがあ
る。Rose が Pinkie の生活に介入することによって生じたこの平安への希

求は、献身的で、どこまでも彼と行動を共にしようとする Rose を通して、Pinkie の内部に激しい葛藤を生ぜしめるのであるが、彼は最終的には、平安を受け入れないままで終るのである。偽りの心中をすべく Rose を連れ出した車の中で、Pinkie が感じた、車の中に入ろうとする巨大な鳥のような力は、Pinkie が求めながらも、抵抗した〈peace〉の象徴であろう。

An enormous emotion beat on him; it was like something trying to get in; the pressure of gigantic wings against the glass. Dona nobis pacem. He withstood it, with all the bitter force of the school bench, the cement playground, the St Pancras waiting-room, Dallow's and Judy's secret lust, and the cold unhappy moment on the pier. If the glass broke, if the beast—whatever it was—got in, God knows what it would do. He had a sense of huge havoc—the confession, the penance and the sacrament—and awful distraction, and he drove blind into the rain. (p.300)

(ある巨大な感情が激しく彼をおそった、それは何かの中に入りこもうとしているようだった、ガラスを押すとてつもなく大きな翼の圧迫。我らに平安を与えたまえ。彼はそれに抵抗した、学校のベンチ、セメントの運動場、セント・パンクラッスの待合室、ダローとジュディーのひそやかな情欲、そして寒い栈橋での不幸な瞬間などから生じた、つらくてむごい力をふりしぼって。もしガラスが壊れたら、もしその獣が——それが何であれ——入ってきたら、誰にもそれが何をするかわかりはしない。彼は巨大な壊滅の力を感じた——告解、痛悔、そして秘蹟——そして恐ろしい混乱を、それで彼はやみくもに雨の中へ車を走らせた。)

Pinkie は車の中で〈昨夜…その前の夜…あなたは私を憎んでないわね、私達があんなことをしたからって〉(p.229)とたずねる Rose に〈そう、憎んでない〉(p.229)と答え、〈ある種の快樂、ある種のプライド、ある種の

何か〉(p.229) が結婚にはあることを認めている。これは結婚ということによって、Pinkieの自我が破られていくことを表わしているのであり、Roseとの結婚を肯定するにいたったPinkieは、初めて他者としてのRoseを受け入れたということになるのである。従って、この会話に続く場面として設定されている、車の中に入りこもうとする巨大な鳥のイメージは、Roseを通して知った、Pinkie自身とは対立するものの力を表わしていると考えられるのである。このガラスを圧迫して、Pinkieに迫ってくるように感じられる力は、幼い頃からの惨めな、いまわしい体験を支えとして生きているPinkieを破壊し、荒廃しようとする力〈a sense of huge havoc〉としてPinkieに受けとめられているのである。それは邪悪であることに徹していたPinkieに恐ろしい心の混乱〈awful distraction〉を生ぜしめる力、つまり邪悪であるPinkieを破滅させる力なのである。Pinkieの敵として設定されているRoseは、このような意味で、Pinkieの存在を抹殺しようとする力、〈peace〉を暗示する力を導入することのできるRoseであることを表わしている。

ところでRoseの姿に焦点を合わせるならば、以上のようなPinkieとRoseの逆説的な関係は、Roseにはほとんど自覚されていないというところに、Rose像の特色をみることができると考えられるのである。Pinkieの冷静な観察や判断や計算、或いはRoseに対する嫌悪感といった心の動きは、ほとんど彼女には理解されていないし、また認めようもしないのである。そのようなRoseをよく表現しているのが、彼女の存在をあらゆる〈goodness〉であり、彼女のPinkieへの盲目的な一途な思いをあらゆる〈I don't care〉という言葉である。それは16才の無知な世間知らずの、貧乏育ちの娘っ子で、〈the stupid innocent face〉(p.107)という表情とか、おとなぶって恋愛経験があるというRoseに向って、Pinkieの云う言葉〈You're green〉〈You're innocent〉(p.106)だけではなく、Roseの本質として〈innocence〉が設定されていることに由来していると考えられるのである。なぜならば、カトリック信者であるPinkieとRoseが、教会ではなく、

告解することもなく、市役所の戸籍係で結婚式を済ませてしまったことは、大罪〈mortal sin〉であり、二人の結婚の場面は次のように描写されている、——

‘It’s mortal sin,’ he said, getting what savour there was out of innocence, trying to taste God in the mouth: a brass bedball, her dumb, frightened and acquiescent eyes—he blotted everything out in a sad brutal now-or-never embrace: (p.225)

(「大罪なんだ」と彼は云った、無垢からどんな味わいがするのかわかろうとして、口唇に神を味わおうとして、真鍮の寝台柱、彼女のおびえて、物も云えない従順な目—彼はあらゆるものを、悲しい獣のようになすべてを賭けた抱擁のなかで消し去ってしまった。)

——のであるが、邪悪の存在である Pinkie にとって、結婚とは、つまり大罪を犯すこととは、〈無垢〉を味わい、〈神を味わう〉ことであるというとき、花嫁の Rose が〈innocence〉であることの暗示があるとともに、そこには〈evil〉である Pinkie と結び合わされることによって、その役割をはたすことになる Rose の〈goodness〉であることが明らかになってくるからである。さらに〈神を味わう〉ということが、聖体拝領の秘跡をも暗示している³⁾のではないかと考えられるとき、Rose の〈innocence〉がかすかに聖性の影を帯びているとも考えられるのである。だから Rose は〈innocence〉のひとつの顕現である善を表わしていると考えられるのであるが、そのような Rose の、Pinkie へのひたむきな、卒直な愛を、結婚の夜、Rose が Pinkie の知らない間に書いておいた走り書きの手紙に読みとることができる。

‘I love you, Pinkie. I don’t care what you do. I love you for ever. You’ve been good to me. Wherever you go, I’ll go too.’ (p.234)

(「あなたを愛しているわ、ピンキー。私はあなたが何をしようとかまわない。永遠に愛しています。あなたは私に良くして下さいわ。)

あなたが行くところへはどこへでも、私も行きます。』)

これは単純で明解な、これ以上必要なことばは見あたらない愛の告白であり、ここには Rose の Pinkie に対する純な、絶対的な信頼と愛と、それにとまなう決断が述べられている。それは 〈innocence〉 の一面であると考えられる幼ない無知な子供の姿⁴⁾をも、Rose がそなえていることに依っていると考えられるのである。世間知らずで無知であるため、Pinkie を素晴らしい男性であると信ずる Rose の姿は、〈a look of the deepest admiration, the most respectful hope〉 (p. 57) 〈her carved devotion〉 (p. 172) 〈childish devoted eyes〉 (p. 231) などの言葉で描写されている。こうした Rose の無知な子供のような忠実で単純な、Pinkie への信頼は、〈I don't care what you do〉という大胆な決断へと発展しているのである。

Rose がしばしば口にする 〈I don't care〉という言葉は、Ida との 〈彼はあなたを愛してないわ〉「私はかまわないわ」中略「かまわないって、どういうこと」「私は彼を愛しているもの」〉 (pp. 150-151) という会話にも、Rose の愛の強さと、その決断とを示すものとして、使われているが、これは Rose の愛の強さ⁵⁾ であるとともに、一途で一方的で、盲目的ですらあることの表われでもある。Rose は先に述べた手紙の中で 〈Wherever you go, I'll go too〉と書いているが、Rose にとっては文字通りの行動を意味しているのであり、罪を告解することもなく心中によって 〈地獄に落ちようとしている〉 (p. 285) Pinkie と共に、地獄に落ちよう、〈その暗闇の中へ彼ひとりでは行かせはしない〉 (p. 285) とひそかに決意しているのである。このひとりで地獄に落ちるようなことはさせはしない、という決意は、Pinkie の死後、司祭によれば、ひとりの聖者の生き方 〈この人は地獄に落ちるような人があれば、自分も地獄に落ちようと決心しました〉 (p. 308) と同じであるとみなされている。しかし Rose の Pinkie と一緒に死ねなかったという悔いは、慰められない。彼女には司祭のことばを理解する判断力はないし、自分の行為の意味づけができるほど 〈knowledgeable〉⁶⁾ ではないのである。彼女はひたすら Pinkie と一緒にありたいと願ってい

るだけである。それは一方では愛の強さ、一途さ、純粋さ、邪心のないことの表われであると同時に、無知であり、盲目的であり、自己中心的ですらあるところの愛の姿でもある。これは最後まで、子供を捨て得ないで、追い続ける、強くて愚かな、盲目的で一方向的な母親の愛情を示しているのである。Rose は具体的な母親のイメージでは描写されていないが、Pinkie について次のような暗示的な描写がある。彼は射的屋に行き、そこに景品として並べてある人形を見るのである。

The shelves of dolls stared down with glassy innocence, like Virgins in a church repository. The Boy looked up: chestnut ringlets, blue orbs and painted cheeks: he thought— Hail Mary...in the hour of our death. (p.22)

(棚に並んだ人形がうつろなガラスの無垢の目で見おろしていた、教会の納骨堂の聖母像のように。少年は見あげた、栗色の巻毛、青いひとみ、紅をつけた頬、彼は思った—アヴェ・マリア…我らの死のときには。)

Pinkie はこの人形を景品として受取り、〈指に火薬の匂いをつけて、神の母の髪をつかんで〉(p.23) 行く、〈無意識に人形の髪をむしって茶色の毛糸をはがし〉(p.23)、レストランのウェイトレスに〈俺には用はないんだ〉(p.23) 〈さあ、とっておけよ。部屋に置いといて、お祈りでもしろよ〉(p.24) といって渡しているのである。聖母を連想させる人形を乱暴に扱う、この Pinkie の姿には、最後まで Rose の愛情を踏みにじって、生命を奪うことを計画した Pinkie の姿が重ねられていないだろうか。さらに結婚のために精一杯服装をととのえて現われた Rose の姿に、Pinkie は教会の聖者像を連想しているのである。

She looked like one of the small gaudy statues in an ugly church: a paper crown wouldn't have looked odd on her or a painted heart: you could pray to her but you couldn't expect an answer. (p.206)

(彼女は見苦しい教会の中にある小さなけばけばしい彫像のひとつのように見えた、紙の王冠や絵にかいた心臓が彼女には奇妙ではなかっただろう、彼女には祈れるが応答は期待できない。)

Pinkie の連想する像がどのような像であるのか明らかではないが、王冠は天の元后である聖母マリア像を象徴するもの⁷⁾である。もっとも冠は聖母マリアのみならず他の聖者の表象ともなっている⁸⁾ので、聖母マリアであると断定はできない。また心臓も聖マリアではなく、他の聖者の象徴である⁹⁾から、マリアであると必ずしも断定することはできないが、先述の人形の連想とあわせて考えるならば、聖母マリアであっても不思議ではない。すくなくとも Rose が Pinkie にとってそのようなイメージを与える存在であるという暗示は確かであろう。この母なるマリアをかすかなシルエットとして従えている Rose の、Pinkie を限りなく追い求め、限りなく与え続ける姿は、作者が、先述したように、Pinkie の遺したレコードを Rose が聴く直前でその描写を止めることによって、より明確になってきていると考えられる。つまりレコードを聴かないということは、Rose が自分の愛が踏みじられていたということ、即ち、なかでもっともひどい恐ろしさ〈the worst horror of all〉(p.310)を知らないことである。それは自らの愛をどこまでも肯定できる Rose である。彼女が胎内の Pinkie の子供が代々存続し続けるであろうことを夢見ているのは、Pinkie への自らの愛が否定されることを知らないからである。レコードを聴かないところで作者が Rose の描写を止め、そして〈the worst horror of all〉へ向って歩む Rose で描写を止めたことは、どこまでも自らの愛を信ずる Rose で終止しているということである。〈I don't care〉と云って、邪悪な Pinkie を追い求め与え続ける Rose は、このような意味で、善意そのもの、Pinkie の邪悪であることと永遠に対峙するものである。このような Rose の姿は、他者を限りなく抱擁しつづけ、限りなく自他ともに肯定しようとする、永遠の肯定という、女性のやさしさを表象していると考えられるのである。レコードを聴かない Rose、つまり〈I don't care〉と自分の信ずるとこ

るを一直線に進むことのできる Rose は、また、〈the worst horror of all〉である絶望を知らない Rose でもある。自分の愛が、自分の存在が、レコードに録音された Pinkie の言葉のように、実は不要であり、彼にとって苦痛であることを知らない Rose なのである。それは挫折を知らない、自分の愛が否定されるということを知らない、自分の存在に限界のあることを知らない、若い、無知な人間の表象でもある。それは 〈I don't care what you do〉という自己肯定と自己満足と、一方的な自己中心の愛をそなえた未熟な人間でもある¹⁰⁾。そして Rose は善意の存在であるために、レコードを聴くべく歩みを進める姿には、〈innocence〉であることの無残さと痛ましさがともなうのである。

ちなみに Rose という名前は、普通名詞の rose が暗示するものを、その背後に秘めていると考えられるので、簡単に rose の象徴するところを述べてみたい。rose は大別すれば、春や若さや肉体の愛の象徴と、精神的な愛、純潔な愛の象徴としてわけることができる。キリスト教に関するところでは、精神的な純潔な愛の象徴となっており、それは天上界の女王としての聖マリアの象徴とキリストの象徴となっている¹¹⁾。この天后としての聖マリアの象徴である rose は、マリアの腰帯施興という伝説に由来していると考えられるのである。腰帯施興とは、マリアの臨終に立会うことに遅れたが、丁度マリアの昇天の瞬間にオリーブ山にひとり来合わせたトマスに、マリアがトマスの不信を憐れんで、自分の昇天の証拠として腰帯を与えたという伝説のことである。トマスはその後マリアの墓所に行って、遺骸がないはずであると、埋葬したばかりの墓を開くことを主張し、実際に開いてみたら棺には本当に屍骸はなくて、ただ神秘の薔薇 Rosa Mystica と百合の花が美しく咲いていた¹²⁾、というのである。こうして rose はマリアの象徴となったと考えられるのであるが、このようなマリアへの暗示を秘めている rose を、Rose という名前は従えていると考えられるのである。

さて、これまで述べてきたような Rose 像が、次作 *The Confidential Agent* においても描かれていると思われるので、Else と Rose Cullen とい

う女性について考えてみたいと思う。 *The Confidential Agent* という作品は、内乱の続く母国で妻を失い、さらに味方のために石炭の買付けをする密使として英国に上陸した、中世フランス語の大学講師 D. を中心に、疑惑、不安、陰謀、殺人、逃亡、追跡等を背景とするドラマである。これは娯楽作品として出版されたものであり、ドラマの進展の面白さが前面に出ている作品であるが、追われる者である D. が、無垢な少女 Else の死を契機として追う者へと変貌し、鉱山の持主の娘である Rose Cullen は、父親ほども年令差のあるこの D. の誠実さにひかれ、恋するようになり、D. の故国へ、D. と共に帰ってゆく物語なのである。

さて、Else という、D. の生き方を変える契機となる少女は、Pinkie と結婚するまでの Rose Wilson と非常によく似ている。

She had all the innocence of a life passed since birth with the guilty.

(pp. 41-42)

(彼女は誕生以来罪深い人々と暮らしながら、人生の無垢であるものをそっくり手渡してもらっていた。)

これはいかがわしい宿の女中として働いている、14才の Else をもっともよく伝えている描写である。彼女は、自分が働いている宿が、或いはそこに入りするおとな達が、世間からみればどのような意味をもっているのか、つまり悪いことが悪いことである、との判断さえつかないという意味で、無知であり、無垢の心をもつ少女でもある。つまり彼女もまた〈innocence〉な存在なのである。なぜならば、彼女の日常の世界を支配している女主人の苛酷な言動に比べて、D. を一見で〈紳士〉(p.43)であると信じ、〈献身的〉(p.59)に仕えようとする少女だからである。D. が秘密の仕事をしていることについても、〈あなたが何者でもかまいません〉(p.59)と、Rose が Pinkie を信じたように、D. を信頼しているのである。D. は Else の〈無垢であることと、世間智に長けていること〉(p.54)に恐ろしさを感じ、自分のような中年の外国人に心を許す、Else の幼い精神

とそれをはぐくんだ環境を思い、〈彼女の献身的な態度に憐れをおぼえ心動かされる〉(p.79)のである。この Else が D. の密書を預ったことが原因で殺害されたと知った時、D. はこれからは、〈追う者、見張る者、隠れ場にひそむ狙撃兵〉(p.130)になることを決心するのである。D. を受身の人生から、積極的に行動する人生へと変化せしめた Else の存在は、換言すれば、世間智に長けていながら、無知であり邪気のない心が、D. の深い同情の対象となったことを表わしている。従って、Else の〈innocence〉であることが、D. の変化の契機となっているということができるのであるが、このような Else の姿は、ウェイトレスの Rose Wilson が Pinkie を、何の疑いももたないで信じてしまった姿によく似ている。貧しく無知で、優しい言葉に餓えていて、単純に人を信じてしまう Rose Wilson と Else は、ほとんど同一人物と云ってもよいと考えられるのである。

Else が結婚するまでの Rose Wilson であるとすれば、D. に恋をする Rose Cullen は、〈I don't care〉と云って Pinkie への愛を貫こうとする、強い愛と責任を自覚する Rose Wilson の姿が、輪郭になっているようである。D. にとっては、Rose Cullen は最初 Else と同様に、彼から見れば自分の娘でもあり得るような存在である。D. の目には Rose Cullen は、〈横柄で、欲しいものが何も手に入らないので、好きであろうとなかろうと、何でも手に入れようと決めている子供〉(p.11)のようである。これは幼くして、すでに人生に失望し、幻滅や不信を抱いている子供の姿であろう。だから D. は Else に対して感じたように、生きていくことの苛酷であること、若くして人生の〈それほど多くの欺瞞〉(p.16)を知らねばならぬことに同情し、戦乱のなかで〈歩ける前から死を知る〉(p.72)母国の人々のように、Rose Cullen も Else も実は人生には限界があることを知っていることに、子供が子供であり得ない時代に生きる不幸を見ているのである。Rose Cullen は若くして、このような人間というものに伴う幻滅を知った存在であるが、彼女の心を捕えたのは D. の誠実さである。

‘...But it was your face. Oh,’ she exclaimed, ‘you ought to know how

it is—there's no trust anywhere. I'd never seen a face that looked medium honest. I mean about everything..., (p. 71)

(「〈中略〉でもそれはあなたのお顔のせいでした。あ」と彼女は声を上げた、「あなたはお知りになるべきですわ——どこにも信頼なんてありませんこと。私はまあまあ誠実に見える顔を、今まで見たことがありませんわ。つまりあらゆることに関してですけど。〈中略〉」)

Rose は、D. の自分の責任にたいする誠実さを知り、そのために D. に接近し助力を申し出るのであるが、不信の生活のなかで誠実さを求めている Rose 自身が、実は非常に正直で誠実な女性として描かれているのである。彼女は、石炭を味方のために買付けることには失敗したが、敵側に石炭が売られることも結果的に妨害することのできた D. と共に、彼の故国に向う船上の人となるのであるが、その最後の二人の会話に彼女の誠実な生き方が良く表われている。

He said, 'I'm an old man.' 'If I don't care,' she said, 'what does it matter what you are? Oh, I knew you're faithful—but I've told you I shan't go on loving a dead man.' ...She said, 'When you are dead, she can have you. I can't compete then, and we'll all be dead a long, long time.' ...She said, 'You'll be dead very soon: you needn't tell me that, but *now...*'(p.247)

(彼は云った「僕は年をとった男だ。」「もし私がかまわなければ」と彼女が云った「あなたがどのようなであっても、そんなことどうでもいいでしょう？ ええ、私あなたが誠実だとわかっているわ——でも私は亡くなった人を愛し続けはしないって、前に云ったでしょう。」(中略) 彼女は云った「あなたが亡くなったら、あなたは奥さんのものよ。その時は奥さんと競争できないのですもの、それに私たちみんな死んでからが長い長い時があるのよ。」(中略) 彼女は云った「あなたはもうじき亡くなるわね、そんなこと云わなくてもいいの、でも今は……」)

Rose Cullen の生き方が正直で誠実であるのは、彼女の愛が死にいたる迄のものであることを認めているからである。恋している D. に向かって、〈あなたが亡くなったら、1ヶ月もあなたを愛することは出来ないわ〉(p.171) と云う Rose は、人間として正直であり卒直であるが、それは逆説的には、生きているかぎりには愛するという彼女を云いあらわしていることにもなるのである。それは人間に関することに死という限界が必ず訪れるということに素直に是認し、その現実を承認した生き方である。従って〈私がかまわなければ、あなたがどのようであつてもかまわないでしょう〉と云う Rose Cullen には、Rose Wilson と同様に、一途な、相手をどこまでも肯定する強い愛とともに、一方的なひとりよがりの愛を認めることができるのであるが、Pinkie を死を超えて愛そうとする Rose Wilson と、D. を死にいたるまで愛するという Rose Cullen とでは、死に対する姿勢が違ってきているのである。つまり死の後までもと願った Rose Wilson は、人間についての絶対的な限界である死を無視しているのである。もちろん彼女はカトリック信者であるから、当然のことではあるけれども、死を超えるということが、自らの愛の可能性を是認するものとなっており、従って絶望を知らない存在であると云えよう。その意味でロマン的な人間像の影さえ感じられるのである。この絶望を知らないという点では Rose Cullen も同様である。彼女は死を是認し、人間には死という絶体的な限界があることを知っているが、〈あなたはもうじき亡くなるわ、そんなこと云わなくてもいいの、でも今は…〉という言葉で、この作品を終えている作者は、いわば死という条件つきで、その限界内での限らない現実肯定をする Rose Cullen を描いているのである。それは、D. に同行することはいずれ死という時——二人にとっての終り——を迎えるであろうと予想しながら、敢えて同行しようとする Rose の、自らの愛の可能性のみに生きようとする態度に表われていると考えられる。自分の愛の可能性に疑いを抱かない Rose Cullen もまた、死という限られた時間内においては、自らについての絶望を知らない存在であるということが出来る。この点で Rose Wilson と Rose Cullen は等質であると云うことができるが、ただ Rose Cullen が

人間の絶对的限界としての死を肯定するという事は、Rose 像に加わった新しい要素であると云うことができよう。

人間であることの最も基本的な状況としての死が、Rose 像に加えられていることは、次章において考察する、*The Living Room* の Rose Pemberton の、絶望へいたる一つの道標となっていると考えられるのである。

(未完)

注

- 1) グリーンが同じ名前を繰返し使うことについて、例えば J.B. Manly は、作者にとって魅力的な女性と好ましくない女性に大別し、同じ名前の女性が同じ特色を共有することを述べ、作品ごとの解説をしているが、同じ名前の女性像の内的変化については触れていない。

Graham Greene: The Insanity of Innocence, by Jane Burt Manly, University Microfilms, Inc. Ann Arbor, Michigan, 1970, Chapter 4

- 2) *Graham Greene*, by A.A. DeVitis, Twayne's English Author Series 3, Twayne Publishers, Inc., 1964, p. 84.
- 3) *The Power and the Glory* のなかに、聖体拝領の秘跡を意味する〈they took God—in their mouth〉ということばが用いられている。William Heinemann & The Bodley Head, 1971, p. 74.
- 4) すでに述べたように、また諸家の指摘しているように、子供っぽい人物は数多く描出されているが、例えば Pyle や Anthony Farrant にも子供という言葉が、その重要な性格づけとして用いられている。拙論 *The Quiet American II — The Innocent* — 「英米文学研究」第11号、— *Innocence of Anthony Farrant* — その2 「英米文学研究」第14号、(ともに梅光女学院大学英米文学会発行) 参照。
- 5) あなたがどうであっても〈私はかまわない〉という表現は、愛の対象に対する無条件、無制限の肯定を前提としているという意味で、キリストの愛を暗示させる。
- 6) *The Basement Room* の純真無垢な Philip と対立的存在である Mrs. Baines の姿をよく伝える言葉である。拙論 *The Basement Room* 論「英米文学研究」第8号(梅光女学院大学英語英文学会発行) 参照。
- 7) 矢崎美盛著、「アヴェマリア」、岩波書店、1965
- 8) カトリック大辞典、Ⅲ、聖人、富山房、昭和49
- 9) 同上

- 10) R.O. Evans は、Rose Wilson について、彼女はあまりにも innocent でありすぎる、疑いを持たない、だから Rose と呼ばれると述べ、作者は innocence は利点ではあるが美德を保証するものではなく、Eve を守るものとはならないことに気づいている、と述べている。The Satanist Fallacy of *Brighton Rock*, by Robert O. Evans, *Graham Greene*, edited by Robert O. Evans, University of Kentucky Press, 1963, p. 167.
- 11) *Dictionary of Symbols and Imagery*, by Ad de Vries, North-Holland Publishing Company, 1976
- 12) 注7に同じ

* 文中の訳文については、九谷オ一訳「ブライトン・ロック」昭和42、早川書房、青木雄造訳「密使」昭和42、早川書房を参照しました。